



TITLE:

隠岐の牧畑

AUTHOR(S):

下間, 忠夫

CITATION:

下間, 忠夫. 隠岐の牧畑. 地球 1926, 6(6): 413-419

ISSUE DATE:

1926-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183201>

RIGHT:

隱岐の牧畑

下 間 忠 夫

隱岐の牧畑はその型式なり方法なりに於て人文地理的に可成興味があると思ふので概要を誌すことにする。

順序として隱岐島全般に就て簡単に自然地理的説明を試みる。隱岐群島は島根半島の北端を北に隔たること約五十軒なる日本海中に位するもので島前と島後とに分れてゐる、前者は故原田博士に仍つて地中海の東部のサントリン島に例へられた様に最高點なる燒火山(五二五米)を中心として西から東北にかけて西之島東より東南に中之島及び西南に知夫里島と各細長い外方に凸面を向けた三島が略環狀に内海を取り圍んだものと數十に近い小島岩礁から出來てゐる群島である。島後の方は前者から約十一軒東北東の方向に離れて存在する略圓形をなす隱岐中の最大島でその面積二四五、六平方軒で島前三島

の合計面積一〇五、二五平方軒の二倍以上に及んでゐて最高標を大満寺山(六〇七米)と呼び一般に東方に高く島の西半部は比較的低い。云ひ換へると東半と西半部との地貌が著しく異つてゐる。これは島を構成する岩石の相異に原因するものである。島前島後共に大部分火成岩から成立つてゐて殊にその或物は從來本邦内地に稀有なりとされてゐるアルカリ岩類に屬すると云ふことが神津博士によつて指摘されて以來漸く岩石地質學者の渡島する數を増した。それで火山島の常として平原甚だ少く大部分低山性の山地で河流の如きも認めらるべきものは甚だ稀である。山地が急に海に迫り然かも波浪の常に高い日本海の海蝕の爲に海岸の風景の勝れてゐる事は既に本誌第五卷第一號に春本理學士に依て面白く示されてゐる。氣候は大體出雲の海岸地

方と大差なく却て海洋の影響と對馬海流の爲に寒暑の差は比較的少い。然し冬季は波浪一般に高く航海の杜絶することも少くない。

次には人文地理的の方面から眺めて見ると隱岐全島を通じ島民三萬七千二百餘人この食料たるべき米は如上の様な地形の關係で大部分は内地(島人は常に斯く云ふ)から移入されてゐるこの價格年平均五十萬圓に上る。島民の生業は半農半漁が最も多い。更に彼等は副業として養蠶植林牧畜等にも従事してゐる。到底唯一つ限りの生業のみに従事してゐては家計を支ふことが出来ぬからであらう。かの隱岐の鯛は島と内地との間の海で島に近い附近で主として獲られるものであるが近年著しくその漁獲高が減じて來たので狭い限られた生産地域を資源とする島の經濟はかなりに逼迫しつつあるらしい。鳥賊の漁獲高の減少の原因を對馬海流の流路移動に置いてゐるが果して然りとすれば他の地でもこれと關係した何等かの事實がある筈である。これに就いても最近隱岐に於ける出稼移民等の増

加の一原因とも考へられるかも知れぬ。林業は地積の比較的廣い島後に殆ど限られ養蠶は全島に涉つて主要なる産業の一である。これは火山岩特に玄武岩地方の特色であるが何分にも面積の狭小なものと空氣の濕潤すぎるのとで餘り好結果は認められない。

斯の如き次第で水田の少い殆ど畑地による島の農業の中で自然に起つた牧畑と云ふ特殊な部分を以下に紹介する。それは畑地に依る農作の内で牧畜と結合した原始的の操作でその現在行はれてゐる地方は島後では北部と南部の玄武岩の噴出してゐる地域に局部的に點在してゐるが島前では殆ど全島に及び就中西ノ島知夫里島の山地は大部分これに當てられてゐる。今この面積を見ると大略左の通りである。

島後約 八〇五町步 二八個所

島前約四六四八町步 四一個所

即ち島後の方は森林地帶多く植林が進んでゐるのと土地が比較的廣いので通常の耕地が多く従つて牧畜の方は餘り進んでゐない。これに引き

代へて島前の方は表土の浅い玄武岩質の小さい島嶼なので地下水も少く森林や水田は極めて少數で岩磐の露出した所か草原か急傾斜の山腹又は



寫眞は島前西ノ島浦郷村大字三度の北方の山頂に於ける八月末頃の牧畑の一例、目下放牧中であるから作物は見えない。寫眞面に牛馬が共に遊んでゐるのや作付中に區別する垣の痕が見えてゐる。

山脊に續いてゐる所が多い。特に西ノ島知夫里島は最も顯著である。云はゞ土地の普通の生産能率と逆比例して分布してゐる譯である。かう

した自然の恵の少い地域を利用して牧畜と同時に農作をやつて行かうと云ふのが所謂牧畑の起りである。牧畑に對して牧畜をやらぬ普通の畑を本畑と云つて區別してゐる。即ち牧畑は或る季間は作物を作り或期間はその地へ牛馬を放牧するもので、悉く急勾配の土地に段階を作りこれを圃地としてゐる。放牧される馬は元來は在來種の隱岐馬と云ふ體格の矮小な丈が一米位の島嶼種に屬するものであつたが漸次歐巴種が移入されて今日は雜種が多い。又牛も大分改良されてゐるが乳牛は飼料の關係で全く見る事が出来ぬ。明治三十七八年戰役に際し露將ステツセルより乃木將軍に贈られた名馬も晩年をこの地の種馬として送つたと云ふ。現在では牛約五五〇〇頭、馬約六五〇頭位で頭數は決して多いとは曰へぬがその大部分は牝であるので性質は殊に温順である。この外近年山羊も飼はれてゐる様である。島産の馬は幼時から山野岩塊の上を歩き廻つてゐるので蹄鐵の必要が無いと云ふことである。牛は幾頭かの牡が放してゐるので

自然に生殖を營むも馬は毎年四、五月の交村落に集めて種付をする。分娩は人家に連れ歸へつて行はせ生れた牝牛牝馬は生後數ヶ月の後内地に賣出されて仕舞ふが牝はその儘島で生ひ立つて財源となるのである。牛馬の所有者は夫々定つてゐるが放牧期間は殆ど共同物の如くその地域内は全く自由にしてゐる。

斯うして或時期が來ると牛馬の群は他の地域に移されて今までの牧場は各所有者の手に自己の家畜を犖して耕鋤し播種し一回か二回の除草を施した儘で殆ど手入もしないで放置するが、今までゐた牛馬の糞尿が天然肥料となつて成長する。人工的には一度も施肥をしない。これは肥料も少く又假令施すべき肥料はあつても急傾斜の山腹を里から遠く搬ぶのは仲々骨の折れる仕事で餘り引き合はないからであらう。そして收穫後は他の地域から再び牛馬を移して畑は純然たる牧場と變る。

農作物は右の如き放任的耕作であるから收穫量は極めて少い。試みに牧畑の一反歩當りの平

均作を示すと次の様である。

大麥五斗五升、豌豆二斗五升、小麥三斗五升
大豆三斗、小豆二斗、

作物も大抵大麥、小麥、大豆、小豆、豌豆に限られ稀れには粟黍、蕎麥、稗等も作られる事もある。

通常牧畑は四區を以て一組としてゐる。各區は木柵又は牆等を共同で圍らし通路には關門を作つて放牧中の家畜の逸散を防ぎ他方では作付中の他の區に入ることを防止してゐる。又外海に面した所は往々百米乃至二百米に近い直立の海蝕斷崖であるから誤つて墜落するものも少なくないので多くは鐵條網を引き廻らしてゐる。

次には牧畑に於ける放牧及び作物の輪栽の順序が大體に一定されてゐるのでこれを述べて見る。この順序は次の様な立場から考へられたものである。即ち放牧の期間にはその地面は家畜の排泄物で自然に肥沃になり土壤は休養される譯である。肥料の多きを要し栽培期間の長い作物の作付をする前には一層放牧の時を長くし且

つ多數の家畜を同一箇所に入れる必要があるし
又冬季になつて牧草の少くなる期節には成るべ
く家畜を廣大地域に分布して飼料を與へる様

にしなければならぬ理である。
前述の様な意味で従來行つてゐる順序は次の
表に示す如き方法を探つてゐる。

放牧
——
作付

目 年 初

區丁	區丙	區乙	區甲	區域	作付物
豆小大	麥小大	豆小大	稗 粟		
					月一
					月二
					月三
					月四
					月五
					月六
					月七
					月八
					月九
					月十
					月十一
					月十二
					月十三
					月十四
					月十五
					月十六
					月十七
					月十八
					月十九
					月二十
					月二十一
					月二十二
					月二十三
					月二十四
					月二十五
					月二十六
					月二十七
					月二十八
					月二十九
					月三十

目 年 三

區丁	區丙	區乙	區甲	區域	作付物
豆小大	稗 粟	豆小大	麥小大		
					月一
					月二
					月三
					月四
					月五
					月六
					月七
					月八
					月九
					月十
					月十一
					月十二
					月十三
					月十四
					月十五
					月十六
					月十七
					月十八
					月十九
					月二十
					月二十一
					月二十二
					月二十三
					月二十四
					月二十五
					月二十六
					月二十七
					月二十八
					月二十九
					月三十

目 年 二

區丁	區丙	區乙	區甲	區域	作付物
稗 粟	豆小大	麥小大	豆小大		
					月一
					月二
					月三
					月四
					月五
					月六
					月七
					月八
					月九
					月十
					月十一
					月十二
					月十三
					月十四
					月十五
					月十六
					月十七
					月十八
					月十九
					月二十
					月二十一
					月二十二
					月二十三
					月二十四
					月二十五
					月二十六
					月二十七
					月二十八
					月二十九
					月三十

目 年 四

區丁	區丙	區乙	區甲	區域	作付物
麥小大	豆小大	稗 粟	豆小大		
					月一
					月二
					月三
					月四
					月五
					月六
					月七
					月八
					月九
					月十
					月十一
					月十二
					月十三
					月十四
					月十五
					月十六
					月十七
					月十八
					月十九
					月二十
					月二十一
					月二十二
					月二十三
					月二十四
					月二十五
					月二十六
					月二十七
					月二十八
					月二十九
					月三十

この表で見ると甲區域には前年から家畜が放牧してあるとすれば五月中旬これを丙區域に移しその跡に粟稗を作付し、而して九月中旬にこれを收穫して再び丙區から家畜を入れ十一月に至ればその一部分の牛馬を乙及び丁區域に入れ他は其儘にして越年する。乙區域には前年から放牧してあるとすればこれを六月中旬に丙に移し大小豆を蒔き、十一月中旬これを取り

入れ前記の如く甲より家畜を入れて翌年に至る。次ぎに丙畑も同様に前の年から放牧がしてあつて五、六月頃には甲及び乙から更に牛馬が加はり十月中旬になると全部甲に移して最も主要なる作物たる麥類の作付に取りかゝる。更に丁區域に就いて見ると先年から引き續き麥が植付けてあるが六月中旬にこれを收穫し續いて豆類を作つて此を十一月の中頃採取して跡地へは甲より家畜の一部を入れて次年に亘る。作付されるものは初年目粟稗類、次年目豆類、三年目麥類及び四年目には前年の晩秋から大小麥が植付けられ六月中旬から豆類が栽培される順序に

大略定めてあるから各區域に就いては四ヶ年の週期で一巡する理となる。この内で粟稗の栽培の後には次年に五ヶ月間豆類を作るのみで三年目の十月中旬まで放牧して土地の休養を最も長く與へて第四年目に於ける麥豆類收穫の準備をするので通常豆類を作つた後の畑を本牧と稱し家畜の数が最も多い。冬季は麥作以外の區域は悉く放牧がされて飼料の缺乏を避けてゐる。

隠岐は對馬海流の寄せ来る所とは曰へ冬季は裏日本特有の北風荒み風波高く降雪も頗々と來るが斯した時節にも牛馬はその儘に牧畑で暮し積雪の甚しい時丈け牛のみを一時集めて海岸の人里に連れ歸へるが馬はそのまゝ北海を渡る寒風を谷間や森の中に避けて數頭體を密着して互に暖を取りつゝ雪の夜を越す。

然し隠岐全體を通じ牧畑は漸次荒廢して唯放牧のみに使用されて來る傾向がある。これは牧畑の地形地味の良い所又は人家に近い所は本畑にせられて行くのもあるし又從來の様な原始的方法では收穫が少いので引き合はないからで

ある。

最後にこの牧畑制の起原に就て考へて見る。
それは判然としないが随分古いものゝ様で承久三年には既に後鳥羽上皇が親しく闘牛を御覽になつた史實もあるから當時は既に少くとも牧畜

はやつてゐたものであらう、又降つて慶長十八年には明かに牧畑檢地の事蹟が残つてゐる。兎に角普通の牧場と異つて農作と關係してゐる點が甚だ原始的で面白いと思ふ。(終)

臺灣に於ける自然人文結合の事實

金 尾 宗 平

一、緒言 二、阿里山の事業 三、角板山の蕃地 四、東海岸一の蘇澳港

一、緒 言

或る見方での地理學の研究對稱たる自然人文結合(地人相關と云ふのも大體同意)の事實は、幾多の方面にそれ〴〵姿を變て現はれてゐるが、その一つは自然の開拓と云ふ具體化である我が殖民地などの様に急激な發達をしつゝある處では、殊にそれが目立つて有り難く感ぜられ

るのが普通である。これを一日も早く味つて見たいと思つて出掛けたのが、一昨年の北海道、樺太旅行、昨年の朝鮮、滿洲行き、今年春の三週間の臺灣巡りであつた、茲に其の實見した所聞いた所、教はつた所、調べた所、感じた所などに依つて、此方面の二三の事實を紹介して見たいと思ふ。

二、阿里山の事業

臺灣に於ける自然人文結合の事實